

## 用法依存理論に基づく小学校英語教育の学習モデル構築

菅井三実 (兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授)

### 目的と背景

本研究は、英語圏における英語の母語習得について具体的なプロセスを説明する「用法依存モデル(usage-based model)」を小学校英語教育に援用し、その妥当性と問題点について検討するとともに、認知意味論でいう「比喩的拡張(metaphorical extension)」の原理を用いて、英語基本語彙の中で小学校段階で習得すべきものについて教員向けの資料を作成しようとするものである。その背景としては、小学校に外国語活動という形で英語学習が導入されて以来、英語の入力を促進する手段として歌やゲームが多用されてきたが、現状の方法では、中学校での英語学習に接続させる接点が見いだせないことと、入力された英語がどのように習得されるかに関する検証が成立しない点で疑問を持ち続けてきた。

### 方法と考察

用法依存モデルは、英語圏における英語の母語習得について具体的なプロセスを説明するものであり、幼児の英語獲得過程に4つの段階があることを示した。すなわち、一語文(生後12ヶ月)→軸語スキーマ(生後18ヶ月)→項目依拠構文(生後24ヶ月)→抽象構文(生後36ヶ月)の4段階であり、このプロセスをランドマークにしながらか小学校英語の学習のポイントを明らかにしようとするのが本研究の目的である。分析するデータとしては、普通教室における外国語活動での児童の英語発話をUSB型ICレコーダーで電子データとして採取し、その分析から下記のような結果を得た。

第1段階の一語文(holophrase)については、Lemme-seeをはじめとして非常にスムーズに習得し、数ヶ月を経た後でも定着度は落ちていなかった。後に児童の書いた感想でも「英語であいづち」が言えたことの自信が回想されていた。一語文は、一語文は、Here-we-go, Here-we-are, Here you go などコミュニケーション上、利便性が高く、少ない音節ながら有用な表現で、生涯にわたって使用するものであるにもかかわらず、中学校以降で学ぶ機会が少ないので、早い段階で習得することが望ましい。

第2段階の軸語スキーマ(pivot schema)については、小学校英語で副教材として用いられているHi friends! から、第3課にあるhow manyの表現を指導した後、how muchへの拡張を試みた。その結果として、how manyの習得には時間を要したものの、how muchの習得はかなりスムーズであり、その過程でhow many muchというエラー形式が観察されたことから、一時的にhow-manyが1つの軸語として作用したものと解釈される。同時に、how manyからhow muchへの拡張に成功したことで、軸語スキーマとしてのhow + □が形成されたことが示唆された。

第3段階の項目依拠構文(item-based construction)については、初めて一般動詞を使った練習でDo you like...?を学び、次いで、What do you like?を学ぶが、児童の中でlikeの定着は良かった。その後、別の動詞wantを導入してWhat do you want?を指導すると、wantと言うべきところにlikeを入れて発話する児童があり、この点でlikeをfirst verbと見ることができ、小学校での英語学習(外国語活動)にもfirst verbらしき動詞が見られることが示唆された。

### 2人称代名詞の比喩的拡張

比喩的拡張については、英語の2人称代名詞youを取り上げた。英語のyouは、使用範囲が日本語の「あなた」よりも圧倒的に広く、日本語で「あなた」を使わないところにまでyouを使うが、この用法は実は日本語話者にとって使いこなすのが難しい。広範なyouの用法を習得するには、むしろyou=「あなた」と覚える前、すなわち小学校英語の段階で学習の方がよいとの立場から、その指導事例を作成した。

### 今後の課題

上述のように、日本の小学校英語においては、用法依存モデルでいう第1段階～第3段階に対応する力が見られることが音声記録の解析から分かった。これらの言語能力は、およそ英語母語話者の1歳児から3歳児に相当する。将来的に英語教育が中学年(3年生～4年生)に広げられることを想定すると、英語母語話者が1歳未満の段階で経験する社会認知的スキルの発達現象について、小学3年生～4年生レベルでの観察と支援が次なる課題として浮かび上がってきたところである。